様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２４２０

研究課題名（和文）日本近代文学と絵画のジャンル横断的交流に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive study of the cross-boundary relationship between modern Japanese literature and illustrations

研究代表者

出口　智之（DEGUCHI, TOMOYUKI）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：１０５８０８２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代日本の文学と美術の関係を考察した。
明治期を担当した出口は、小説作者が口絵や挿絵を描く絵師・画家に出した指示の状況と、絵画と小説との関係を幅広く探った。また、大正期を担当した荒井は上司小剣や菊池幽芳を中心に研究を進め、挿絵がきっかけになって芝居化された作品などから、当時の挿絵の位置を考察した。昭和戦前期を担当した松本は、当時の新聞小説における挿絵の役割を明らかにし、戦争文学や時代もの大衆小説における挿絵の機能を解明した。これに加え、三者で石井鶴三に宛てられた中里介山・北沢楽天の書簡を翻刻紹介し、大正～昭和期における挿絵画家の社会的立場や雑誌編集の背景などを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、これまで分断して研究が行われてきた日本近代文学研究と日本美術研究を架橋するものとして、領域横断的に進められた。これによって、小説作者たちが口絵・挿絵に深く関わり、絵画にも作者の意図や構想が反映していること、第一印象の強い挿絵のイメージから芝居など他ジャンルの作品が生み出されたこと、特に戦争文学などでは挿絵が現地の状況を伝える報道的な側面を有していたことなどが明らかになった。その結果、絵画の側から文学作品を考える重要性と見通しが明確化され、また従来の美術史研究においてはまったく看過されてきた口絵・挿絵が同時代の美術関係者に有していた存在感の大きさが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In Meiji era, it was popular that the painters made illustrations for literary works with following instructions of novel writers. The specific ways of bookmaking, the novelist's strategies of using illustrations, and the effect of such collaboration were made clear by this project.
In addition to that, the position of illustrations in Taisho era was clarified through the research on cross-genre works. In this age, some illustrations were published separately from the novels, and they were enough popular to be remade as a play.
In Showa pre-war era, illustrations for war novels serialized in newspapers had an aspect as news illustration. They were in equal position of novels, and so were the positions of writers and painters. The symbolic incident of establishing the social position of painters was "Sashie- Jiken"; the illustration trial made by Nakazato Kaizan and Ishii Tsuruzo. This project also made a research on this incident with the manuscript letters from Kaizan to Tsuruzo.

研究分野：日本近代文学

キーワード：口絵　挿絵　新聞小説　石井鶴三　中里介山　北沢楽天　書簡

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

従来より、日本近代文学と絵画の関係についての研究は一定の成果を有していたが、それらは著名な作家や絵師・画家（以下画工と総称）だけを対象とするか、あるいは大略的な流れを記述するにとどまり、個々の事例・表現・表象を通史的な観点から俯瞰して位置づけるような作業を行ってこなかった。また、時代や媒体によって異なる作家と画工との関係を正しく見定めず、画工が完成原稿を読んで自由に描くという、現代同様の工程を自明の前提としたため、少なからぬ解釈の誤りも含んでいた。近世の戯作者たちは画工に対し、下絵を描いて細かに指示するのが普通であり、この慣習は次第に衰えつつ昭和初期まで存続していた。この基本的な事実が見逃されてきたのは、従来の研究が主に完成した作品だけを扱い、書翰や日記等の一次資料や、制作経緯を語った二次資料の精査が十分に行われてこなかったためである。

こうした状況に対し、本研究の代表者と分担者はゆるやかに連携しつつ各自の研究を展開していた。代表者・出口智之は明治期をおもな研究対象とし、上記のような角度から作家・画工の関係の捉え直しを試みた。また分担者・荒井真理亜は大正期を専門とし、単行本や新聞・雑誌の連載作品と挿絵の関係、また作家と画家との間で交された書簡を調査・分析して、画家が主体的に小説を解釈して挿絵の制作を行うようになった状況を明らかにした。もう一人の分担者・松本和也は、昭和戦前期の新聞連載における小説家と挿絵画家との具体的な制作の進めかたや、小説と挿絵の協奏効果について考察してきた。

加えて、三者は石井鶴三宛書簡集（信州大学蔵）の共同調査を断続的に行い、一部の資料を紹介しつつ論考を発表してきた。その調査の過程で、中里介山や北澤楽天といった、重要な作家や美術関係者からの来簡が多数存在することが確認された。そこで、この資料群の調査・研究を一つの結節点としつつ、三者がより緊密な連携のもとにこれまでの研究を発展的に統合することで、近代文学と絵画との関わり、作品制作の状況の時代的変遷、作品が生み出す意味作用と表現効果などを総合的に把握・解明すべく、本研究が企図されたものである。

２．研究の目的

本研究は、近代日本の文化史上で深い影響関係を持った発展をみせながら、これまで十分には検討されてこなかった、文学と口絵・挿絵といった絵画との関わりを、通史的な見地から明らかにすることを目的とする。具体的には、新聞や雑誌に掲載された小説と口絵・挿絵との関わり、単行本における絵画の位置づけ、作家と画家との関係のありかたなどの様々な角度から、明治・大正・昭和の三代にわたる事例を取上げて詳細に検討することで、現在の研究では分断されがちな、文学と美術との接点やその歴史的変遷についての総合的な解明を目指す。加えて、上記の石井鶴三への来翰集の調査を基礎として、近代文学と絵画をめぐる諸問題、たとえば作家と画家との関係や力学の変遷、各時代における口絵・挿絵の具体的な制作状況、紙誌面上における小説と絵画のコラボレーションによる意味作用や表現効果などを解明・考察する。そのうえで、近代文学と絵画との関係についての通史的な視座を構築し、領域横断的な見地から近代の文化を把握してゆく。

３．研究の方法

明治・大正・昭和戦前期の三時代について、それぞれを出口・荒井・松本が分担して担当し、新聞や雑誌等に掲載された絵入り連載小説、文学と絵画との関係にまつわる記事などを広く捜索して問題提起的な事例の収集につとめる。同時に、石井鶴三宛書簡集の翻刻・研究を共同で進め、一次資料のなかから作家と画家との関係を捉えなおす。

【明治期：出口】まず『東京朝日新聞』などの新聞、また第二次『新小説』のような雑誌に掲載された絵入り小説や記事などを可能なかぎり網羅的に調査し、小説本文と絵画の間で問題を抱えている作品例や、作家が画家に出した指示の状況・口絵・挿絵画家の位置づけ・小説と絵画との関わりなどを示す資料を捜索する。その調査でピックアップされた資料について詳細に検討し、明治期の作家の口絵・挿絵への関わりや、雑誌掲載をめぐる事情を実証的に解明する。また、作家が画家に細かな指示を与えていた慣例、明治期に特有な木版・石版・写真版など複数の印刷技術の混在なども視野に入れて、明治期における小説と口絵・挿絵との関係を総合的に解明する。

【大正期：荒井】上司小剣の「東京」〈愛欲篇〉〈争闘篇〉に石井鶴三が描いた挿絵を検討することで、作家と画家とがおなじ芸術観を共有し、協働して作品に取組んだ大正期の制作状況を明らかにする。また、菊池幽芳作・鏑木清方画「百合子」も取上げ、幽芳と清方の合作による『百合子画集』の位置、挿絵がきっかけとなった芝居化などとあわせて、文学と美術のコラボレーションのありかたを考察する。この研究を通じ、挿絵画家の立場の確立期だった大正期における、個々の作家や画家が有していた様々な認識を包括的に把握する。

【昭和戦前期：松本】戦時下のイデオロギーに深く関わった新聞連載小説として、吉川英治作、矢野橋村・石井鶴三画「宮本武蔵」を手掛かりに、この時期の新聞小説における作家と画家との関係について考察を進める。特に、公刊された作家・挿絵画家の日記・随筆、鶴三挿絵に関する同時代評や各種回想記、鶴三の挿絵原画（松本市立美術館・茨城県近代美術館他蔵）、さらには石井鶴三宛書簡集（信州大学蔵）に含まれる吉川英治からの来簡などを活用し、「宮本武蔵」紙面の制作過程や、小説と挿絵のコラボレーションの意味作用などについて具体的に検討する。続いて、火野葦平作・中村研一画「花と兵隊」を対象として、戦争という背景における新聞の報道体制、国策イデオロギー、軍の意向、芸術家の立ち位置、小説・挿絵の記事・報道写真との距離の取り方、読者層の興味などを考察する。これらの研究を通じ、明治・大正を通じて形成されてきた作家と画家との協働体制、あるいは小説と絵画とのコラボレーションのありかたの変容を明らかにする。

【共同】信州大学蔵の石井鶴三宛書簡集から、まずは大正期の「大菩薩峠」およびいわゆる「挿絵事件」（1934）に関わる中里介山や関係者からの書簡を中心に、翻字および注釈研究を行う。「挿絵事件」とは、鶴三が自分の挿絵だけを収めた挿絵集を刊行したところ、介山が著作権の侵害だとして告訴に踏切った事件で、結局は介山が訴えを取下げることで終結し、挿絵の地位が確立する契機となった係争である。その背後の関係を、鶴三に送られた介山の書簡から明らかにするのを第一の工程とする。第二に、日本初の多色刷漫画雑誌『東京パック』などを主導し、日本のカートゥーンの開拓者となった北沢楽天からの書簡を取上げ、鶴三との関係について明らかにする。鶴三は最初期、楽天のもとで『東京パック』に挿絵を描いていたことがわかっており、以後両者は最晩年にいたるまで交流があった。その楽天が鶴三に送った 90 通あまりの書簡を翻刻・公開することは、挿絵画家としての鶴三の位置を考えるとともに、草創期の漫画雑誌の編集の裏面を解明することにつながるはずである。

４．研究成果

出口は、明治期の小説作者が自作の口絵や挿絵を描く画家に出した指示の状況と、そうした絵画と小説との関係を探るため、第一に樋口一葉に焦点を絞った論考を発表した。この論考では、一葉が自作の附されるほぼすべての口絵・挿絵に下絵で指示を与えていたこと、本文とともに絵画も活用して作品世界を読者のもとに届けようとしていたことを明らかにした。第二に、絵画における描写と文学を接続させるため、明治期の小説や紀行における風景描写について考察した学会発表・論考も公にした。第三に、『東京朝日新聞』に掲載された宮崎三昧「塙団右衛門」「鉄牛遺事」の二篇について検討を加え、明治中期の絵入り新聞小説の執筆方法や挿絵の活用、および挿絵と本文の進捗をあわせることの困難について明らかにした。第四に、同紙で活躍した饗庭篁村と、『読売新聞』に属した尾崎紅葉がともに、挿絵を不要とする態度を取っていたことを手がかりに、篁村が見出していた挿絵の問題と、紅葉が打出した挿絵活用の新機軸について明らかにした。第五に、第二次『新小説』掲載の口絵・挿絵を網羅的に調査し、雑誌における絵画の機能や作家による活用の諸相について解明した。

これらの明治期に関する研究成果に加え、小説作者が自作の口絵や挿絵を描く画家に指示を出す慣習がいつごろまで続き、そこにいかなる問題が見出されていたのかを考察するため、上記「挿絵事件」に関する論文 2 本を発表した。これは、従来は狷介な介山が鶴三に対してぶつけた言いがかりのように解されてきた主張について、当時発表された法律家たちの見解を精査し、また条文・判例とも照らしあわせたところ、司法の判断としては介山の訴えが認められた可能性が高かったこと、だからこそ挿絵画家たちは自身の権利と社会的立場を確立するために団結して行動を起さねばならなかったことを明らかにしたものである。

続いて荒井は、大正期の小説・挿絵・芝居の協働の事例として、菊池幽芳作・鏑木清方画「百

合子」の調査・分析を行った。「百合子」の成功を支えた挿絵の機能と、その挿絵が話題を呼んだことで芝居化にいたるまでの契機を詳細に明らかにし、小説の劇化において挿絵が果した役割について考察した。また、石井鶴三宛書簡集から新たに発見された鶴三宛の上司小剣の書簡を活用した研究を進めた。この新出資料により、『婦人公論』に掲載された上司小剣「森の家」に関する挿絵の掲載の中絶が、単なる小説家や画家の事情ではなく、雑誌の編集方針の転換によるものだったことや、小剣の代表作「東京」の出版状況、特に単行本化のたびに新たな挿絵が描かれ、その挿絵は小説家と画家の相談によって決められていたことなどが解明された。この研究を通じ、大正期におけるメディアの存在感の伸張と、メディアミックス展開における挿絵の重要性が明らかになった。

松本は、まず吉川英治作・石井鶴三画「宮本武蔵」を対象とし、小説としての同時代受容のポイントを探った上で、挿絵の効果について検討した。また、火野葦平作・中村研一画「花と兵隊」を対象とし、戦争文学における挿絵の役割について考究を進めた。そのために、洋画家・中村研一が挿絵を描いた新聞小説について網羅的に調査し、その挿絵の特質、制作の方法を明らかにし、その上で、火野葦平「花と兵隊」における報道的側面などについて考察した。これにより、従来看過されてきた中村の挿絵画家としての一面が明らかになるとともに、印刷技術・戦争表象など、昭和戦前期という時代における新聞小説挿絵の問題が明確化された。また、石井鶴三関連資料を用いて、別に歌集『鬚日』をめぐる歌人・石原純と鶴三との交流を考察した論考を発表した。

さらに、三者の共同研究として、信州大学蔵「石井鶴三関連資料」の調査研究を進め、高野奈保氏・杲由美氏・多田蔵人氏の協力のもと、中里介山からの来信全 40 通、および北沢楽天からの来信全 95 通について、翻印および簡単な注釈を附して紹介を行った。その一部が各研究者による個別の研究に活用されたことは、上記のとおりである。特に、「大菩薩峠」挿絵制作の具体的な状況や「挿絵事件」の背景、楽天の手がけていた『東京パック』の編集事情、同誌廃刊後の両者の交友などが一次資料によって明らかになった意義は大きく、資料群として今後の研究にも資することが期待される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 17 件）

①出口智之、「挿絵無用論と明治中期の絵入り新聞小説―饗庭篁村「小町娘」・尾崎紅葉「笛吹川」「青葡萄」の挿絵―」、『日本文学研究ジャーナル』、査読無、第 9 号、2019、pp.12-26
http://www.kotenlibrary.com/journal/

②出口智之、「絵入り新聞小説としての宮崎三昧「塙団右衛門」「鉄牛遺事」―挿絵から小説を見るということ―」、『言語社会』、査読無、第 13 号、2019 年、pp.132-149
http://gensha.hit-u.ac.jp/general/bulletin.html（近日公開予定）

③出口智之、「第二期『新小説』における文学と絵画―口絵・挿絵の戦略と羈軛―」、『比較文学研究』、査読無、105 号、再録決定済、ページ数未定（印刷中）

④出口智之、「一葉小説と口絵・挿絵」、『文京区立森鷗外記念館度特別展　一葉、晶子、らいてう―鷗外と女性文学者たち』、査読無、2019 年、p.22

⑤荒井真理亜、「上司小剣『東京』の出版に関する補遺―信州大学所蔵石井鶴三関連資料から―」、『信州大学附属図書館研究』、査読無、第 8 号、2019 年、pp.13-26
http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/journal08.html

⑥荒井真理亜、「菊池幽芳『百合子』の展開―小説・挿絵・芝居―」、『人文学研究』、査読無、第 4 号、再録決定済、ページ数未定（印刷中、2019 年度上半期に刊行予定）

⑦松本和也、「挿絵画家としての中村研一―「海燕」「女の一生」「春と行列」「花と兵隊」」、『大衆文化』、査読有、第 20 号、2019 年、pp.56-74

⑧荒井真理亜・髙野奈保・多田蔵人・出口智之・杲由美・松本和也、「〔新出〕石井鶴三宛北沢楽天書簡等資料九十五点―翻印と紹介―」、『信州大学附属図書館研究』、査読無、臨時増刊第 2 号、2019 年、pp.1～158
http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/journalspecial2.html

⑨出口智之、「中里介山作・石井鶴三画「大菩薩峠」と「挿絵事件」の背景―挿絵制作の時代的転換と旧著作権法の解釈について―」、『信州大学附属図書館研究』、査読無、第 7 号、2018 年、pp.29-47
http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/journal07.html
⑩荒井真理亜、「上司小剣「森の家」と大正期の「婦人公論」―信州大学所蔵石井鶴三関連資料から―」、『信州大学附属図書館研究』、査読無、第 7 号、2018 年、pp.65-75
http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/journal07.html
⑪松本和也、「吉川英治『宮本武蔵』〈後半〉における〝道〟―パラテクストと石井鶴三挿絵」、『信州大学附属図書館研究』、査読無、第 7 号、2018 年、pp.17-23
http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/journal07.html
⑫荒井真理亜・髙野奈保・多田蔵人・出口智之・松本和也、「〔新出〕石井鶴三宛中里介山書簡四十通　翻印と註釈―『大菩薩峠』関連書簡を中心に―」、『信州大学附属図書館研究』、査読無、臨時増刊、2017、pp.1-80
http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/journalspecial.html
⑬出口智之、「一葉小説の口絵と挿絵―作者一葉との関わりから―」、『論集樋口一葉』、査読無、第Ⅴ巻、2017、pp.195-213
⑭出口智之、「新聞小説と挿絵に関する問題系―「大菩薩峠」をめぐる石井鶴三宛中里介山書翰から―」、『信州大学附属図書館研究』、査読無、臨時増刊、2017 年、pp.81-88
http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/journalspecial.html
⑮松本和也、「火野葦平「花と兵隊」の基礎的検討」、『立教大学日本文学』、査読無、116 号、2017 年、pp.64-77
⑯松本和也、「石井鶴三と石原純『鬚日』―新出石井鶴三宛石原純書簡から」、『信州大学附属図書館研究』、査読無、第 6 号、2017 年、pp.17-23
http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/journal06.html
⑰出口智之、「近代紀行の出発と風景への眼差し―東京を描いた紀行を視座として―」、『文学』、査読無、第 17 巻第 6 号、2016、pp.59-75

〔学会発表〕（計 8 件）
①出口智之、「近世絵入り文芸の残照―近代口絵・挿絵に残る江戸―」、法政大学江戸東京研究センターProject2 江戸東京のユニークさ・シンポジウム「追憶のなかの〈江戸〉」、法政大学、2019 年
②出口智之、「近代文学と口絵・挿絵の問題―絵画から読む小説」、第 6 回文学と美術研究会、立教大学、2018 年
③松本和也、「石井鶴三『宮本武蔵』挿絵に関する予備的考察」、第 5 回文学と美術研究会、相愛大学、2017 年
④出口智之、「明治文学と絵画―小説と口絵・挿絵の関係をめぐる諸問題」、幕末明治文化研究会 12 月例会、明星大学、2017 年
⑤出口智之、「明治中期における小説と口絵・挿絵の関係について」、19 世紀文学研究会、法政大学、2017 年
⑥松本和也、「火野葦平「花と兵隊」の本文と挿絵」、第 4 回文学と美術研究会、大阪大学、2017 年
⑦荒井真理亜、「菊池幽芳「百合子」における小説・挿絵・芝居の関係」、第 4 回文学と美術研究会、大阪大学、2017 年
⑧出口智之、「近代紀行の出発―饗庭篁村を中心に―」、日仏会館・國學院大學・東洋文庫共催ワークショップ「文人から学者へ―歩く・集める・記す」、日仏会館、2016 年

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：荒井　真理亜

ローマ字氏名：（ARAI, Maria）
所属研究機関名：相愛大学
部局名：人文学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：90612424

研究分担者氏名：松本　和也
ローマ字氏名：（MATSUMOTO, Katsuya）
所属研究機関名：神奈川大学
部局名：外国語学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：50467198

(2)研究協力者

研究協力者氏名：髙野　奈保
ローマ字氏名：（TAKANO, Naho）

研究協力者氏名：杲　由美
ローマ字氏名：（HINODE, Yumi）

研究協力者氏名：多田　蔵人
ローマ字氏名：（TADA, Kurahito）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。